食い違う。つまり『素問研』の『素問』の底本は顧從德本ではないと断定できるが、底本はどれかについては不明である。というのは、文字の明確な一四条の句について、二十四巻本の顧從德本・周曰本・寛文三年刊本、十二巻本の古抄本・元刊本・熊宗立本、『太素』、『甲乙経』、注解書の『素問呉註』・『素問集注』・『類経』と総合的に校勘してみたが一四条すべて合致するものは無かったからである。おそらく、『素問研』の標出された『素問』の句は稲葉通達の手（改正）を経たものだろう。

4．まとめ

正しく『素問研』を読むとすれば、少なくとも対校・他校をおこなう必要がある。さらに、すでに誤って伝抄されている箇所も数多くあるので、できる限り出典にあたって確認しなければならない。この煩些な作業を経てこそ『素問研』の『素問識』をこえる価値を引き出すことができよう。

（川口市）

26 鍼灸経穴名考証の試み
―穴名同語の出典と用法―

岩井佑泉

鍼灸療法で用いられる経穴、いわゆるツボの名称についての研究はいくつかあるものの、医学書以外の中国古典の中で経穴の名と同じ語が特定の意味をになって用いられている例を集成する作業の報告は未見であることから一九八九年より二年間に約四〇の経穴について古典中の用例を集めたので、その中からひとつ紹介したい。

【崑　崙】

出典(1)『書經』夏書・禹貢　編著者未詳　戦国時代末期成立か

用法○織皮、崑崙、析支、渠、搜。西戎、即叙。（織皮は崑崙、析支、渠、搜。西戎、叙に即く）

夏は先殷期（前一五〇〇年以前）の王朝で、龍山文化の遺跡

がその所在かと言われる。禹はその伝説上の初代の王名。「禹貢」篇は戦国時代の地理知識を背景に成立する最古の体系的地理書。毛織者を着た（あるいは献上品とする）四つの西戎（西方諸部族）のひとつとして「崑崙」の名が見える。

出典(2)『荘子』内篇・大宗師　伝・荘周著　前四世紀成立か

用法〇堪坏、得之、以襲崑崙。（堪坏は之を得て、以て崑崙に襲る）

「之」とは道のこと。「黄帝は之を得て、雲天に登る」等と続く。堪坏は山神の名で、崑崙は道を得た彼が治める山の名である。同じ『荘子』の外篇「知北遊」（荘周学派の継承者によって前二世紀までに成立か）には「（道を知らざる者は）崑崙を過らず、太虚に遊ばざるなり」としている。「太虚に遊ぶ」中継点であるから、現実の山名というより、神話的、観念的なものであろう。

出典(3)『爾雅』巻七釈水　編著者未詳　前二世紀までに成立か

用法〇河出崑崙虚、色白。（河は崑崙虚に出づ、色白し）

晋の郭璞注に『山海経』を引いて「河は崑崙西北隅に出づ」と、また「虚は山下の基也」という。神話的な山名から現実の河（黄河）の源という認識の移行が見られる。

出典(4)『太上黄庭外景経』　編著者未詳　東晋・永和一二年（三五六年）王羲之の写本あり

用例〇子、欲不死、修崑崙。（子よ、死せざらんと欲すれば、崑崙を修めよ）

唐・梁邱子注に「崑崙とは頭なり。人をして脳中の泥丸を養は令めば、不死にして長生を得る也」という。

〇崑崙之上、不迷誤。（崑崙の上、迷誤せず）

ただし王羲之の写本に「崑崙之性」とある。梁邱子注に「崑崙は頭と為す也。其の中に遊戯する所。日月運行し、寒暑更々易り、終に誤たざる也」という。『黄庭経』は人体を小天地に譬え、山中の楼閣、堂宇を臓腑になぞらえ、また任脉、督脈を水流に比しているから頭頂を天下の河源である崑崙にしているのはあやしむに足らない。『資生経』にいう「『明堂』有上崑崙、又有下崑崙。『銅人』只云崑崙、而不載下崑崙。豈『銅人』不全耶。抑、名不同。未可知也」と。頭部と足部に同名穴のある例は臨泣、竅陰をあ

げることができる。『靈樞』経脉に「膀胱足太陽之脉、起於目内眥、上額、交巔…」とある通り、上崑崙、すなわち百會（巔）は下崑崙に通じていること臨泣、竅陰の例と同じである。藤堂明保『中国語音韻論』によると「／k～1～／型の連綿字は、丸いもの、廻転、空っぽなどの基本的意義をもつ」とされるが、「崑崙」の原義は弁髪を丸めて頭に巻いたチベット系部族（羌）の称ではなかったか。やがて「太虚」（空っぽ）に通じる神話的山名となり、古地図に瓢簞（壺盧、やはり／k～1～／型）の形に描かれる河源とされ、人体にあっては「丸い」頭とされたものであろうか。

（日本経絡学会）

27 古典にみる砭鍼の臨床的意義について

[1] 坂本　秀治・○[2] 市川　太郎

石ばりの最初の記述は、紀元前十一世紀から十二世紀頃の資料を集めると言う『山海経』とされる。中国医学における五つの治療法の起源を五つの方角に配置している『素問』異法方宜論篇において「砭石は東方より来る。従って東方に配置される」と説述している。また「血気形志篇」王氷注によれば「石は石鍼を謂う。即ち砭石なり」としている。

一方ニーダムは砭の用語について、その著『中国のランセット』の中で「辞書編纂者により〃いしばり〃と言う奇妙な語が与えられることが多かった」と言っている。

有名な神医「扁鵲」は砭石に通じ、扁鵲とはまた「石鍼」をさすこと、ないしは「石鍼の神の名」であるかもし